

令和元年度 輪之内町立福東学校 自己評価書 (集計表)

学校の教育目標	豊かな心 たくましい力のある子	
経営の重点	明日も行きたい 行かせたい 楽しい学校	

評価基準A: 実践し、効果をあげることができた。B: 実践し、一応の効果をあげることができた。C: 実践し、僅かだが効果をあげることができた。D: 実践したが、効果をあげることができなかった。

町の重点	評価の窓	教員評価ポイント	評価	2学期までの成果	3学期及び来年度以降の課題と改善策
【学校経営】 全教職員が協力して活力ある学校経営をする。	勤務の適正化と教職員が健康でやりがいをもてる経営	87	A	・支援員や共同サポーターに、仕事を分けることで、教員の仕事を減らすことができた。 ・チーム福東として子どもたちのために同じ方向を向いて指導にあたることができた。水曜日18:00に帰宅することで、心や体に余裕をもつことができた。 ・職員会議、打ち合わせなどで、パソコンを使って資料提示をしていることで、時間と手間の省力化ができています。	・8のつ日も早帰りがなくてはならないが、その分他の日にやるべきことをやる必要があり、更に見直しをもって仕事を効率よく進める必要がある。
【研修】 自己の課題を明確にし、主体的に研修を進め、確かな指導力を身に付ける。	学校教育目標実現に向けて資質向上を図り、組織的・継続的な研修の実施	80	A	・研修が定期的に行われ、今一番問題視される「いじめ」についてや、時事問題に応じその都度研修ができた。 ・定期的なチェックを行うことで、不祥事根絶のための意識が継続できた。校内研究授業に、意欲的に取り組み、授業改善を図ることができた。	・町研に向けて各学年で具体的に取り組むことを明らかにして実施し新年度を迎えるようにする。 ・外国語では、来年度から本格的に始まる教科化に向けて、指導方法や評価等についての研修会を行う。
【教科指導】 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、思考力・判断力・表現力及び自ら学ぶ意欲や態度を育て、学力向上を推進する。	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	77	B	・単元のねらいに沿って、授業のスリム化を意識した研究授業になった。また、全学級の研究授業から、学べば学べばとたくさんあった。 ・校内研を通して、授業の進め方や子どもの意見の生かし方などを考えていくことができた。学習規律など、ほかの学級の様子を自分の学級に生かすこともできた。	・2学期の校内研で明らかになったことを、3学期の説明文で実践してみる。特に、毎時間手元に辞書置いて活用する、児童が学んだことを書く、技の見直し(技見つけとその効果)と活用など。そして、授業の板書を残す。 ・3学期は週末に本を持ち帰り読むことで読書量を確保、さらにその本の感想を書くことで質を向上させ来年度につなげる。
【道徳教育】 自己を見つめる力や他を思いやる心を育てる。	生き方についての考えを深める特別の教科道徳の充実	73	B	・毎時間話し合い活動を行い、自分の生活と結びつけた振り返りが行われるように指導し続けた。・帰りの会の様子見つけや教師の話しに道徳で学ぶことがつなげていくように評価し続けている。 ・SSTを取り入れて学習し、具体的な場面で、どのように考えたらよいか、どのように行動したらよいかを考えさせることができた。	・具体的な場面を、さらに児童一人一人の個別の場面にまでつなげて考えさせ、日常の生活とつなげることができるようにする。 ・1年生で授業をしている、やはり話を聞かざるだけで建前しか話さない。やはり動作化や、ロールプレイングをといわれ、自分の本音の気持ちで語れるまでにした。
【外国語教育】 外国語に慣れ親しみ、コミュニケーション能力を高める。	主体的にコミュニケーションを図る姿が具現される指導方法等の工夫	80	A	・毎週1時間の授業を子どもたちがとても楽しみにしていて、意欲的に取り組んでいる。・ALTの先生を中心に、楽しく様々な活動を取り組めるよう、打ち合わせを通して授業の進め方を考えることができた。 ・ALTの先生、担任の先生方を中心に、児童が楽しく活動できる英語の授業ができています。	・毎回の事前打ち合わせで子どもたちの実態と時間配分を考慮した活動にしていることで、更に主体的なコミュニケーションを図る姿の実現につなげた。 ・県教育委員会の方針を受け、町全体として新しい教科書を活用した指導方法や学習評価について具体的に考えていく。
【総合的な学習の時間】 探究的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質・能力を育てる。	「ふるさと輪之内」に学ぶ態度と輪之内を愛し誇りに思う心を育成する探究活動の充実	77	B	・出前講座を活用し、児童は体験的な学習をすることができた。 ・校外学習を多く取り入れ活動の中で学んだことを「ふるさと輪之内」を副教材の内容と結びつけ、自分で行うことは何かを考えさせることによって、ふるさと輪之内を意識したまとめをすることができた。 ・5年生が防災教育について、体験的に学ぶことができた。	・子どもたちの実態に合わせた教材を考えていく必要がある。中学校との内容も踏まえ、郡や、町の総合的な学習の時間部会で検討していく必要がある。 ・タブレットの導入で個人が探究する課題について、選択肢を広げることが可能になった。学期ごとにオリエンテーションを設け、ゆとり考え、決められるように。 ・各学年の体験活動を、確かめたり見直ししたりして、計画的に行う。
【特別活動】 所属感を高め、よりよい生活や望ましい人間関係を築くとする自主的、実践的な態度を育てる。	望ましい人間関係や学級集団としてのまとまりを育てる学級経営の充実 (QU検査の活用)	73	B	・委員会のキャンペーンや呼びかけ、放送での結果報告などが盛んのおかげで、学校や学級の員として所属する意識は高い。学級の生活を高めたり児童の心を育てたりすることができた。 ・QU検査の結果から、教師の観察だけでは計り知れない子どもの内面を見ることができ、支援の仕方やその個の子どもについて考えることができた。	・QU検査を生かしての働きかけやそれによる児童の姿や学年末までに明確にする。さらに、児童の創意工夫を生かした委員会活動や係活動に着手してをもつ。 ・QUの結果と日頃の観察をも検討し、支援の仕方を考える。
【生徒指導】 共感的な児童生徒理解を徹底し、よりよい人間関係の形成を図り、自己指導能力を育てる。	児童生徒理解の深化を図り、教職員と児童生徒との信頼関係の構築	80	A	・にこにこアンケートをふまえた教育相談や生活ノートの日記を読むことで児童とたくさん話することができた。 ・毎週の教育相談の時間と休み時間の動きや日々の行動を把握する中で、一人一人を理解し、本人に自分のよさを自覚できるように声をかけ続けることができた。 ・にこにこアンケートをもとに話を聞くことができた。帰りの会のかみやみつけでたくさん手を挙げて発表することができた。いじめ0宣言を唱えるだけでなく、取り組みをしたことでより具体化することができた。	・幼少期から人間関係が濃いので、固定的な見方になりがちだが大勢の人を多面的に見ていく。職員間で子どもの良き交流ができればよい。 ・各学級の児童を多角的に観る目的で、教科で授業を交換してもよいのでは。 ・偏った人間関係づくりが自分たちの弱さであることに気づくようにし、あいまっタッチや握手などの行動で示す活動を取り入れて問題を未然に防ぐ。
【キャリア教育】 社会的・職業的自立に必要となる資質・能力を育てる。	勤労観・職業観を育成する体験活動の位置づけと事前・事後指導の充実	70	B	・委員会活動や、清掃活動など、意欲的に取り組める児童が多い。 ・福っご掃除を通して、クラスの掃除以上に緊張して頑張る子どもが増えていて効果大きい。	・ボランティア活動を積極的に行っていきたい。 ・福っご掃除で身につけた無言掃除を、クラスの無言掃除に結びつける。
【健康安全教育】 運動に親しみ、進んで健康で安全な生活を営む態度を育てる。	自ら命を守りきる防災意識を向上させるための指導方法や指導体制の工夫改善	70	B	・100%完璧訓練を行うために、事前指導をしっかりと行うことができた。 ・ルールを守る意識がけがの予防であることに気づき、道徳や保健体育の授業後意識が高まった。命を守る訓練を行うことで、普段から気にかけるべきことを再確認することができた。	・子どもたちの運動量を十分に確保する体育の授業を目指して、工夫改善する。 ・来年度は、本年度の反省や、町の保健主事会で教えていただいたことをきちんと反映させ、より効果のある指導をする。
【特別支援教育】 一人一人の教育的ニーズに応じ、自立した社会参加するための基盤となる力を育てる。	特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制づくりと合理的配慮の構築	87	A	・一人一人に合った指導体制があり、合理的配慮がなされて日々生活できている。 ・特別支援学級の子どもの実態に合わせた授業を工夫したり、話し合いの場をもつたりすることで、保護者の信頼を得ることができた。支援員と連携して、子どもに寄り添い、心の安定を図ることができた。 ・特別支援学級の児童についても、通常学級に在籍する児童についても、手厚い支援がされている。	・遊びなど、バリアフリーではないので、そういった視点でも福っご活動などで誰もが楽しめるというミッションを与えたい。 ・特別支援学級の子どもも目指す姿やつなげた力をさらに明確にした支援や工夫をする。
【人権教育】 他者の大切さを認め、互いに人権を尊重する望ましい人間関係を醸成する。	児童生徒と全教職員が一体となったいじめや差別を許さない学校・学級づくり	90	A	・いじめに對して、児童も職員も高いアンテナは張れている。 ・誰に対しても平等に振る舞うことが大切であると気づき始めている。自分の弱さを振り返ることができるようになってきた。 ・児童間でトラブルがあるとなつたらずに、生徒指導や管理職に報告し、複数の職員が連携して聞き取りや指導にあたる体制が機能していた。指導だけでなくその後の経過観察や確認もされている。	・3学期以降、にこにこアンケートは毎月家庭に持ち帰り、重要書類袋に入れて提出する。 ・決まった仲間と遊んで人間関係が固定しないように学級全員での遊びや福っご遊びの時間をしっかりと確保したり、学年(部)間交流の時間をもつたりする。
【ICT教育】 児童生徒の情報モラルを高め、情報社会に対応できる情報活用能力を育てる。	ICTを有効活用した学習活動の充実	87	A	・タブレット使用により、一人の児童がその時間に作成したものを一瞬で大勢の児童に見てもらい、意見を交流しつづけるようになった。 ・校内研を生かし、タブレットを使用して自分のよさを実感できるように授業を行うことができた。 ・タブレットの導入により、授業形態や指導形態の拡充が図れた。	・様々な活用方法を学び、どの職員も活用できるようにしたい。 ・タブレット機能をもっと知り、授業で活用するためのスキルを身につけたい。 ・タブレットを使った有効な学習を振り、交流する。
<p>【学校関係者評価】</p> <p>どの学級でも、明るい雰囲気、子どもが堂々と発表することができている。先生があたたかく子どもを受け入れ、指導していると感じた。</p> <p>働き方改革に、管理職を中心に、全員が前向きに取り組んでいることがわかる。子どもを中心におきながら、さらなる改善をすることで、先生がゆとりをもって指導できることが大切である。</p> <p>「いじめ」については、これからは早期発見・早期対応を大切にするとともに、現在、大切にしている互いを「思い合う」心を持って、いじめを減らしたりなくしたりすることにつながる。</p> <p>「読書」について、具体的な手立てをもって推進していることがわかる。今後も、家庭に持ち帰らせたり時間をとらせたりするなど、家庭での読書の習慣が身に付くよう、保護者への啓発や連携を図るようにする。</p> <p>・命を守る訓練がきちんと行われている。さらに、子ども自身に、自分の命を自分で守る力をつけることが大切である。</p> <p>・ICTの機器が充実している。効果的な活用のためには、教員自身も学ぶことが大切である。子どもの意欲や力となる指導を期待している。</p>					